

連載 25 溝口健二『元禄忠臣蔵』における可視のものと不可視のもの

溝口健二『元禄忠臣蔵』は情報局国民映画参加作品としてつくられ、冒頭に「護れ興亜の兵の家」という字幕が出る。

しかしながら興行的には失敗であったと伝えられる。前編の封切は1941年12月1日、後編の封切は1942年2月11日で、真珠湾攻撃を挟んでの公開となった。建築監督を務めた新藤兼人は開戦で映画どころではない暗い日々であったと回想している。古川隆久『戦時下の日本映画：人々は国策映画を観たか』（吉川弘文館、2003年）は、国策プロパガンダ映画に笛吹けど踊らずという反応をみせた民衆の姿を読み取っている。

『キネマ旬報』が『映画旬報』と改称した1942年1月1日号「掉尾の興行戦を語る」座談会では玉川四郎（邦楽座）、武田俊一（銀座映画劇場）、武井國夫（帝都座）、藤沢圭之介（電気館）、三神良三（日本劇場）らを集めたが、『元禄忠臣蔵』前篇の興行結果を受けて、当たらなかった理由を語り合うこととなった。内田岐三雄「元禄忠臣蔵（前編）」（『映画旬報』1942年1月1日号）は「人を疲れさせ、退屈感を抱かせる」とも述べている。

だが退屈だろうか。



溝口健二監督『元禄忠臣蔵』DVD ジャケット
松竹株式会社、2014年リリース



松の廊下の吉良上野介と梶川与惣兵衛のショット

木下千花『溝口健二論：映画の美学と政治学』（法政大学出版局、2016年）は、「日常生活における権力というものを知り抜いており、それを画面内の距離のドラマとして残酷なまでに視覚化することにとりわけ秀でていた溝口は、『元禄忠臣蔵』の鍵となる幾つかの場面で、聞こえよがしな「面当て」を、こうした距離と視軸、オフスクリーン空間によって成り立つドラマとして演出している」と指摘する。

カメラは松の廊下と石庭を捉え、極めてゆっくりと滑走する。雅楽と思しき笛が響く（引用者注・鳥の声かとも想われる）。すると、こんどはフレーム外から男の声が聞こえてくる。カメラは右へ重々しくパンをし、「梶川殿。恐れ多くも御勅使に対して御台所よりお礼言上を申し上げるような大事をなにゆえに直々にこの吉良上野介にお尋ね下さらぬか」というあたりで、声の主である上野介その人をフレームに収め、聞き手の梶川も画面右に含める。（略）上野介は強い語調で画面右奥に向かって喋り、内匠頭の無能・不心得ぶりに対する強い批判を続ける。梶川は恐縮するばかりだ（略）吉良はカメラ側に向き直り、梶川を従えて左手前へとフレームアウトする。ここで、梶川にブロックされていた人物の姿が後景に見える。（略）浅野内匠頭その人である、観客はここで事後的に、先ほどの吉良の言葉は単なる陰口や中傷ではなく、本人が居ると知っての強烈な面当てであったということを理解する。内匠頭は立ち上がり、刀の柄に手を掛けて上野介を追うことに

なる。

松の廊下はこのシークエンスであっというまに刃傷の場となる。退屈どころではない。

一方、城殿^{きどの}智行は、「ブロック」された浅野内匠頭、「陰口」「面罵」という解釈には、見落としがあるとする。「溝口が演出した浅野の怒りは、朝廷と幕府の権力が交錯する松の廊下で、もっとも緊張の高まる勅答の儀直前において、己の全存在を公衆の面前で構造的に否認されたこと、その場に端座しているにもか

かわらず、「この場にふさわしくないお前ごときは、みずから、ここにはいないことにしていろ」という理不尽きわなりな主体の抹消を吉良に強要されたことにむけられているのだ」（「見えない傍観者——溝口健二と「あまりに人間的な」映画——」『大妻女子大学紀要』2015年3月）と論じている。

わたくしたちは何を観せられて、何を観ることが抑圧されているのか、極度な緊張のもとで、『元禄忠臣蔵』冒頭から問いかけられているのである。